

44 の失われつつある暮らしの価値

<フォーマット>

44 の暮らしの価値の番号●暮らしの価値

リード文

■キーワード

1●自然に寄り添って暮らす

じりじりと照りつける夏の暑さ、すべてが凍りつく冬の寒さ。季節のめぐりとともにやってくる気候のきびしさをあるがまま受けとめる中に、かつての暮らしはありました。一日の過ごし方も同じ。日の出とともに起きて田畑で働き、日暮れとともに一日の仕事を終えたのです。自然に寄りそう暮らしは、山の色、波の音、風のそよぎなど、微妙に変化していく自然を五感で感じることで支えられていました。

■風を通す

■お天とさんとともに

■季節の変化で段取り

■自然のサインを読む

2●自然を活かす知恵

身近な野山から得られる天然の素材—樹木や草、木の実や葉は、暮らしになくてはならない大切な資源でした。何が、どんな効能と薬効を持つか。人々は手に入るさまざまな素材を知り尽くし、それらを多彩に活かす知恵と技を身につけていました。そして、手をかけ時間をかけ、ていねいに素材と向き合って、無駄なく生活に役立てました。暮らしはすべて自然の素材でできていました。

■葉も根も実も活かしきる

■井戸で冷やし、温泉で温まる

3●山、川、海から得る食材

暮らしの基盤は命をつなぐための食。栽培し育てる作物だけでなく、山や野原、川や海から採集して得るものも大切な食料でした。春、夏、秋、冬、どこに行けばどんな食材を手に入れられるか、人々の頭には、しっかりとした食べものの地図と暦ができ上がっていました。季節がめぐってくると、人々はどこかそわそわと急く気持ちで採集に出かけたのです。それは、暮らしの大きなよろこびであり安心でもありました。

■山がもたらす季節の恵み

■田んぼも堀も魚の宝庫

■海がもたらすごちそう

4●食の基本は自給自足

家族の命と暮らしを守るために、野菜や豆を育て、米をつくり、果樹を植え、卵や肉を得るために鶏やウサギを飼う。食べものは買って手に入れるものではなく、そうやって自分たちで育てまかなうものでした。1年を通して、家族全員が食べていくのに十分な量の食料を確保していくために、田畑で働く毎日でした。

- 穀物と野菜を育てる
- 粉ひき、油しぼり
- 鶏肉・ウサギ肉

5●てまひまかけてつくる保存食

季節ごとにどっさりと収穫される食べもの。それを無駄にせず食べつなぐために、欠かせなかったのが保存するための知恵です。腐敗を防ぐために、魚や野菜にはたっぷりと塩を振り、また焼いたり寒風にさらしたりして、少しでも長く食べつなぐ工夫が重ねられました。保存食が充分にあれば、作物が不作でも災害が起きても安心です。食の基本は、備えにありました。

- 干し餅、水餅、凍み餅
- 味噌があれば安心
- 干し栗
- 冬の備えは漬物
- しょっぱい魚
- 万が一に備える

6●質素な毎日の食事

ご飯と味噌汁に、添えられた漬物や納豆、おひたし。そして、たまにごちそうとして付けられるイワシや塩サケなどの魚。地域地域でその中身は違いますが、毎日の食事は、畑から採れる野菜を用い保存しておいた漬物を並べる質素なものでした。ご飯は白米に麦を加えることが多く、季節ごとにはほぼ変わらない献立が繰り返されていきました。

- 麦ごはんに一汁一菜
- 魚がタンパク源
- 一人ずつのお膳
- 出かけるときは弁当を持つ
- 甘いおやつが待ち遠しい

7●ハレの日はごちそう

正月や年末の年取り、そして地域の氏神様の祭りの日は、ふだんとは打って変わった

くさんのご馳走が食膳に並びました。お赤飯や煮しめ、大きな煮魚は、祭りの日の晴れやかな気分を高めてくれるもの。腹いっぱいになるまで食べるお正月の餅は、新年が来たよろこびを実感させてくれるものでした。普段の食事が質素だったからこそ、ハレの日のごちそうは、ひときわ鮮やかによろこばしく感じられたのです。

- 心踊る祭りの膳
- 正月を迎える

8●野山で遊びほうける

子どもたちの遊び場は野外。野山で、川で、路上で、寺の境内で、子どもたちは夢中になって遊んでいました。遊びのときはいつも集団、歳の違う子どもたちがひとかたまりです。歳上の子から歳下の子へ、集団の中ではたくさんのことが伝えられていきました。危ないところ、薬草の使い方、肥後守の使い方…遊びは人と人のつきあいのルールを学ぶ場でもありました。

- 遊びの工夫
- 山や川で遊ぶ
- 浜で遊ぶ
- どこでも遊び場
- 子ども同士
- 自然からもらうおやつ

9●水を巧みに利用する

命あるもの、水がなくては生きてはいけません。水は家族の命と暮らしを支える、まさに生命線でした。水道のない時代、人々は山からの沢水や湧き水を屋敷に引き込み、井戸を掘り、川や堀の水も利用して暮らしていました。水を汲み、家に運び込む仕事は重労働でしたが、女や子どもも担いました。それだけに、人々は水質に敏感で、少しも無駄にすることなく大切に使いこなしたのです。

- 水を使い分ける
- 水を確保する
- 湧き水・沢水
- 家の前の堀
- 井戸水
- 水汲みの苦労
- 水売り

10●燃料は近くの山や林から

煮炊きをするにしても、風呂焚きをするにしても、欠かせないのが燃料です。基本とな

るのは薪で、数軒が協力して山に出かけ、伐採から運び出しまでを共同で行いました。軒の下に積まれたたくさんの薪は農村のおだやかな景観をかたちづくるものでした。そして、山のスギ林から拾うスギの葉、浜のマツ林で集めるマツの葉、屋敷内で得る枯れ枝も、炊き付けに大切に活かされました。

- 杉の葉を拾う
- 薪を切り出す
- 松葉をさらう
- 亜炭で風呂炊き

11●家の中心に火がある

寒さきびしい冬。家の中でいちばん暖かいのは囲炉裏やこたつのまわり。静かに燃える薪を見ながら家族はみんな囲炉裏に集まり、こたつ布団に足を入れて体を温めました。煮炊きをしたり夜なべ仕事をこなしたり話をしたり、火は家の中心であり家族のだんらんの場でもあったのです。いうまでもなく、裸火は危険なもの。大人たちは子どもたちが危なくないように目を配り、見守っていました。

- 囲炉裏を囲む
- 火鉢に集まる
- 煮炊きはかまどで
- 火のやりくり
- ほのぐらい明かり

12●自然物に手をあわせる

新年は、お正月様をお迎えして祝うもの。氏神様は、家と家族をずっと長く守り続けてくれるもの。そして、神棚には、神様がたくさんいらっしゃる…。家の中にも、屋敷の中にも、森の中にも、神様は存在していました。人々は、その力をいただくことで、無事に今日を過ごし明日を迎えられると信じていたのです。朝に夕に、自然物に感謝をこめて頭を垂れ、手をあわせたのでした。

- 自然からいただく力
- 神様に拝む

13●庭の木が暮らしを支える

庭は、どんな家にもなくてはならないものでした。町場の小さな庭にも、人々は柿、梅、ビワなどの果樹を植え、季節ごとの豊かな実りを味わいました。そして、片隅には畑を整え野菜を育てたものです。平野部の農家が家のまわり育てる分厚い屋敷林は、まさに森でした。食料だけでなく、家の建替えの木材から燃料、堆肥まで、暮らしを営み農を支えるほとんどの資源を、そこで調達していました。

- 果樹の恵み
- 大木を役立てる

14●暮らしを映す家のかたち

農家の住まいは地域ごとに似通った様式を持ち、建てて何代も住み継ぐものでした。そして、広い土間では藁仕事をこなし、囲炉裏の上には煙を利用して米を貯蔵し、大きな畳敷きの部屋は夏になると建具を払って風を通すという具合に、そのかたちは暮らしを映し出すものでもありました。どんな住まいが使いやすく、暮らしやすいか。家は、長い時間をかけ人々が工夫を重ね洗練させてきた、風土を活かした暮らしのデザインといえるものです。

- 農作業ための大きな屋敷
- 保管のための蔵や小屋
- 境のない間取り

15●一年分を備蓄する

かつては半年先、1年先を考えながら、暮らしの中でさまざまな備えを行なっていました。たとえば、燃料となる薪は、たいていの家で1年分を備え、中には10年分も備蓄する家がありました。備えあれば憂いなし。十分な備蓄があれば何が起きても、暮らしの基本が崩れません。それは万が一の自然災害への備えにもなりました。何より、備えは、気持ちにゆとりと安心をもたらしてくれました。

- 燃料を備える

16●何でも手づくりする

衣食住のすべてにわたって、必要なものは買うのではなく自分の手でつくる。これが暮らししていく基本のスタイルでした。麴も味噌も醤油も、赤ん坊のおしめも紋付きも、炭すごやむしろも、果ては柿もぎの道具まで家庭内で手づくりしたのです。材料の多くは野山など身近なところで手に入る天然の素材です。人々は材料を熟知し、親から子へ技術を手渡していきました。

- 女の針仕事
- 縄ない、藁仕事

17●直しながらいねいに使う

一度手に入れたものは衣服であっても道具であっても、大切にしてお手入れしながら使ったものでした。手入れすれば、ものは必ず長持ちすることを知っていたのです。そして、傷みがひどくなる前に、こまめに修理を施したものでした。修理を重ね使い込んでいくことは、さらにもものへの愛着を深めていくことにつながっていきました。

- 仕立て直し
- 道具の手入れ

18●最後の最後まで使う

ものは、とことん、最後の最後まで使うことも常でした。使い切ってもものの寿命をまっとうさせたあとは、さらに別の使い道で新たな命を吹き込み、中途半端に使って捨てるようなことは決してありませんでした。女たちは布を大切にし、ボロ布を合わせて縫い直し、新たな仕事着をつくり上げました。それは、廃棄が際立って少ない暮らしでもありました。

- ものを使いまわす
- 水は暮らしの糧
- 食べものは捨てない
- あくを貯蔵する
- ゴミは堆肥にする
- 貴重な人糞

19●工夫を重ねる

自分の手でつくり出すこと、限られた素材を最大限に活かすこと。こうした暮らし方は、知恵をしばり工夫を凝らす習慣を育むものでした。生業はもちろんのこと、衣食住すべてにわたって、少しでも楽なように、効率が上がるように、おいしくなるように、人々は創意工夫を重ねました。どんな小さな工夫であっても、それは創造的な行為です。創意を働かすことは単調な作業をおもしろくすることを、人々は知っていました。

- 考えながらつくる

20●身近に生きものがいる

農家に馬は欠かせません。農耕馬として使っただけでなく、外出や荷物の運搬のときは荷車を引かせました。中には、厩を母屋の中に設け、人と馬がいつも顔をつきあわせて暮らす農家も あったほどです。屋敷には番犬として犬を飼い、米や蚕をネズミから守るために決まって猫も放されていました。そして卵をとるために数羽の鶏も飼ったものです。生き物の世話をし生き物に助けられ、いつも身近に生き物の気配がある中に、人の暮らしはありました。

- どこの家にもいた馬
- 家の中で飼う
- 肉と乳と蜜を得る
- 野山や川で

21●暮らしの中に歌がある

テレビもなく、ラジオを聞くこともまだ少なかった時代、人々は大人、子どもを問わずよく歌っていたようです。仕事のときは、労作歌を歌いました。繰り返される単調な作業も、節をつけ歌えばはかどることを、実感しながら歌っていたのでしょう。小正月や節分などの伝統行事の中でも、独特の節回しで唱えられる台詞がありました。近所から聞こえてくる音の響きは、季節の風物詩でもありました。

■伝えられる仕事歌

■掛け声が響き渡る日

22●助け合うしくみ

地域には、数軒の家がまとまって助け合う「結」とよばれる組織がありました。「よい」「よっこ」「よこ」など呼び方はさまざまですが、近所同士が助け合うための仕組みで、必ずどの地域にもあったものです。「結」に属する家々は、田植え、屋根葺き、結婚式や葬式のときは、家族と同じように力を出しあい手助けし合いました。また、家長、姑、若い嫁同士が親睦を深める「講」とよばれるつながりもありました。

■結で行う田植え

■屋根葺き替えは共同作業

■葬式は地域で

■海辺の助け合い

■共同で確保する燃料

■数軒で分け合う水

■集落中が使う水車

■助け合いの心

23●分け合う気持ち

しっかりと支え合う、助け合うということだけでなく、ご近所同士には、もっと気軽なちょっとした貸し借りやもののやり取りもありました。囲炉裏の日をうっかり消してしまったときにお隣から火をもらったり、お風呂のない家の人たちがある家に入りこいたり…。それは、お互いが負担を感じることなく、ありものを分け合うゆるやかな助け合いでした。暮らしの中で自然に生じてきた助け合いは、双方に安心を与えていました。

■火をもらう

■お風呂をもらう

■あふれる人情

24●つきあいの楽しみ

困ったときにそれとなく手助けする近所同士では、隣の家のお宿居はとても低いもの。子どもが上がり込んで自分の家のように遊び、夕方になるとご飯をごちそうになって帰ると

いうのも、よくあることでした。隣の家の子が悪さをすれば、自分の子のように叱りました。つきあいはわずらわしいことではなく、にぎやかな交流がよろこびを倍にし、つらいことや悲しいことを軽くしてくれることを、人々は知っていました。

■家族のようにつきあう

■地域の集う場

25●人をもてなす

つきあいは、もてなしたり、もてなされたりのくり返し。来客があれば、食事をつくって酒を振るまい、夜は座敷に布団を敷いて泊めるのは普通のことでした。客人には心を込めて接したのです。料理の段取りと準備、寝具の用意など、家庭にはもてなしに心をくたく心構えと技術がありました。ゆったりとしたもてなしの時間は、交友をさらに深めるものでもありました。

■客を迎える

■おふるまいを受ける

26●出会いの場がある

地域には、さまざまな出会いと交流の場がありました。青年団は地域で活動しその将来を担う人材を育てました。田植えはよそから手伝いの人が多く入り、華やいだ田んぼは若い男女が出会う場にもなりました。地域の人々が、親睦を深めながら物見遊山を楽しむ講もありました。閉じられているようでありながら、地域には外のから訪れる人を招き、また出かけて出会いを生む場が巧みに用意されていたと言えるようです。

■地域の出会いの場

■外の人と出会う

27●祭りと市の楽しみ

決められたように過ぎていく普通の生活の中に、楽しみと華やぎのアクセントをつけてくれたのが祭りや市です。遠くから響く祭りのお囃子や家々をまわる神輿、人や物が集まる市のざわめきは、子どもばかりでなく大人をもわくわくさせるものでした。祭りに帰ってくる家族や親戚との再会や地域の人々が一同に会する楽しみのために、人々は準備に余念がありませんでした。地域の外からやってくる人や物、情報は地域を活気づけました。

■年に一度の楽しみ

■祭りににぎわい

■祭りのごちそう

28●行事を守る

お正月様を迎えるための年末の準備に始まり、家庭では1年をとおしてさまざまな行事

が行われました。そのひとつひとつに意味があると信じて、人々はていねいに先祖代々受け継いできた習慣を守っていたのです。それは、家の安泰を願う大切なしきたりでしたが、同時に人々はそこにかげがえのない楽しみも見出していました。そして、行事を無事に終えることは、日々の安心を実感することでもあったのです。

- 家長がになう
- 子どもたちの行事
- 季節の節目に
- 地域で守る

29●身近な生と死

戦前に青年時代を過ごした人の多くは、「ご兄弟は何人ですか？」という質問にとっさに答えられません。乳幼児の死亡が多く、また戦争で命を落とすこともあって、兄弟全員が成人し年齢を重ねることがまれだったからです。当時は、年寄りや病人の看取りも家庭でした。一方で、10歳、20歳と、歳の差のある弟や妹が誕生することも決してめずらしくありませんでした。家の中には、いつも人の生き死にがあったのです。

- 兄弟や子の死
- 家の中のお産

30●大ぜいで暮らす

祖父母に父母、そして子どもたちが6、7人というのが一般的な家族像。それに加え、まだ所帯を持たない父の弟や妹、子どもたちにとっては叔父、叔母がいるという家も少なくありませんでした。また、女性の出産期間が長く、姑と嫁の出産が重なることもあったのです。大きな農家では、家族以外にも住み込みで働く数人の従業員がいて、家の中にはいつも人の気配が満ちていました。

- 10人以上の大家族
- 住み込みの人

31●家族を思いやる

大ぜいで暮らしていても、家族同士には温かな心の通い合いがありました。思うように働けない両親の代わりに田畑に出ること、病に伏せる舅の世話をすること、家族に美味しいものを食べさせること…。家族のだれかのために仕事をするのは、自分のよろこびになったのです。貧しくても、いや貧しいからこそ家族は助けあうもの。弱い者を助け守ることで家族は結束を固め、楽しいことを分かち合えばよろこびはさらに大きくふくらんだのでした。

- 年長者との交流
- 親を思う、子を思う

32●みんなが役割を持つ

家の中では、みんなに役割がありました。だれもが自分にできることをこなし、それは力仕事に難しい年寄りや子どもも同じでした。ささやかな小さな仕事であっても、それぞれがしっかりと与えられた役割を担うことは、ともに暮らす一員としての自覚を高め、助け合って暮らすための基盤となりました。みんなが仕事をまっとうすることでそうやって暮らしはまわっていったのです。

- お嫁さんの仕事
- 家長の役割
- 年寄りも働く

33●子どもも働く

小学生ぐらいの年齢になれば、子どもでも立派な働き手に数えられます。家の掃除や風呂焚き、田植えのときの苗運びなど、そう力を要しない仕事から、風呂の水汲みや堆肥運びまで、かなりの重労働にも駆り出されました。農家の仕事は実に多くの手を必要とするものだったからです。家族の一員として働くことで、子どもたちは将来必要となるさまざまな技術を身につけていったのでした。

- 年齢に応じて手伝う
- おつかい
- 農作業
- 水汲み・風呂炊き
- 掃除
- 子守り

34●ともに暮らしながら伝える

教えたり、伝えたりするための特別な場を設けなくても、大切なことは、親から子へ年長者から年少者へ、暮らしの中で自然にいつのまにか伝わっていくものでした。いっしょに過ごしながら交わすさりげない一言や、目の前で繰り返される作業や行為から、子どもたちは大切なことを感じ取り学んだのです。ともに生活するからこそ、教えは実感をもなったものとなって受け継がれていったのでした。

- 摂理を教える
- 観察することから
- 知識を教える
- 知恵を伝える

35●いくつもの生業を持つ

野や山や海が生活の舞台だった時代、ひとつの仕事を生涯を通してやり通すという生き方はむしろ少なく、人々は季節に応じて違った生業を持ち、また主業のほかに副業を持って暮らしていました。気候や風土の影響を大きく受ける中で、そうしなければ生活は成り立たないものだったのです。こうした生き方によって身につけた多様な技術と知識は生きる力となり、いざというときに人々を助けるものにもなりました。

- 半農半漁
- 生業を組み合わせる
- こづかい稼ぎ
- 売りに出る

36●お金を介さないやりとり

船上げを手伝って魚をもらう、油じめや製粉のお礼に炭を渡す、賃金の代わりに米で支払う…。そんなふうには、お金ではなく物をやりとりして人々は暮らしていました。すべての基準がお金にある現在とは違って、お金よりすぐに役立つ物の方が確かだ喜ばれたのです。それだけに、物を見る目が必要であり、やりとりの中で人々の目はおのずと鍛えられていきました。

- 手伝いでやりとり
- 物々交換

37●町と村のつながり

町とその近隣の村々は、密接につながっていました。山間の村からは薪や炭、野菜が、浜に近い村からは魚や貝が、町につぎつぎと運ばれてきました。村の人々は町に荷を下ろすと、活気ににぎわいを楽しみながら店をまわって、子どもたちへの土産や普段はなかなか手に入らない物を買って帰りました。物の生産と売り買いを通して、町と村が支えあう暮らしがありました。

- 村から町へ
- 町と村をつなぐ店

38●小さな店、町場のにぎわい

町には小さな店がたくさん軒を連ね、買い物客でにぎわいました。店の人と客とのやりとり、客同士の立話、そのまわりで遊ぶ子どもたちの姿、行き交う荷馬車…。活気は店から路上へあふれ出ていました。職人たちが腕によりをかけ、つくって売る店も多くありました。ブリキ屋、蹄鉄屋、鍛冶屋、提灯屋などの店先には学校帰りの小学生たちが固まり、その作業を飽きることなく見入っていたものです。

- 軒を並べる店
- 職人仕事に見入る

39●振り売り、量り売り

天秤棒を担ぎ、籠を背に、たくさんの商品を持って歩く行商人の姿は、町でも村でもよく見かけたものです。向かうのはお得意さんの家々。縁側に腰掛け荷をほどけば、そこが親しい会話の飛び交う店先になったのでした。買う側にとっても、家族数も暮らし向きもわかっている行商人とのつきあいは、便利さに加え気も楽で安心なものでもありました。酒や砂糖、塩、お菓子、酒などの高価なものは、量り売りで必要な分だけを求め、無駄なく使いきりました。

- 売りに出る
- 魚売りがくる
- お菓子屋がくる
- 季節の行商人
- 量り売りで買う

40●どこまでも歩く

交通手段が汽車や一日数本のバス、馬車しかなかったころ、移動の基本は何といっても歩きでした。学校に通うときも買い物に出かけるときも、歩く。雨の日も雪の日も、歩く。子どもも大人も、歩く。2時間、3時間の道のりを苦にすることもなく、みんながどこまでも歩いていました。自分の歩く速度を知っていれば、かかる時間はおのずとわかります。自分の足は、最も頼りになる間違いのない移動手段でした。

- 歩くのが基本
- 馬で運ぶ
- 鉄道で行く

41●ささやかな贅沢

普段の生活は、地味で平板なものです。そんな生活を送りながらも、人々はそこに小さなよろこびを見出す術を知っていました。分相応な暮らし中にささやかな贅沢を感じ取り、味わう感受性を持っていたのです。干し柿、新しい下駄、卵、朝風呂とビール…。決して豊かとはいえない時代ではありましたが、贅沢品として挙げられている物は、贅沢の感じ方の基準は私たち自身の中にあることを教えてください。

- 装う楽しみ
- 心踊るごちそう
- くつろぐひととき

42●ちょっといい話

自然に働きかけ、自然と対話し、体を使って暮らしてきたお年寄りたちは、自分のこと

ばを持っています。長く生きてきた中で得た実感、感慨、発見、驚きなどが、会話の中でつい口をついて出るのでしょうか。それは自分をなぐさめ、力づけるものになっているようです。そこには、誰かから受け取ったことばもあります。受け取って渡す。年寄りのことばは知らず知らず、まわりの人に力を与えてもいるのです。

- 子どものころ
- 思い出の人
- 長生き
- まちに暮らす
- 暮らしの1コマ

43●ちょうどいいあんばい

ちょうどいいあんばいを見定める暮らしがありました。お酒で「もつきり」という飲み方があります。これは買い置きにすると飲み過ぎてしまいますが、ちょうどいいあんばいの量の飲み方で、ちょうどよい酔い加減になれるというものです。その他、ちょっとだけ戸を開けると風が通る、囲炉裏の燃えかすの処理を工夫するとほんのりと温かい感じが出せるなど、ちょうどよいあんばいの心地よさが生活の中にありました。

- おおらかな心持ち
- ほどよい加減

44●生かされて生きる

自然に生かされていると思いながら暮らしていました。自然は突如猛威を振るいます。台風が過ぎ去るまで家の中でじっとしています。雨が降らなければ雨乞いをします。人間の力ではどうにもならないことがよく起こります。この経験の蓄積があるので、自然に感謝し、生かされているという感覚を持ちながら生きているのです。

- 苦労も楽しみも